

平和の尊さ 命の尊さ

問 総務課広報広聴係 ☎43-7025

多くの尊い命を失った戦争が終わり、今年で65年を迎えました。

二度と戦争をしないことを決意し、守り続けてきた平和物に満たされ、穏やかに暮らす毎日。しかし世界では、今も戦火が絶えず、日々多くの命が失われています。

時の経過とともに悲惨な戦争体験を風化させることなく、多くの戦争を知らない世代が平和の尊さ、生きることの尊さを大切にしていかなければなりません。



平和祈念・戦没者慰霊式

8月12日、平和祈念・戦没者慰霊式が市民文化会館で行われ、戦没者の冥福を祈るとともに、恒久平和の誓いを新たにしました。

慰霊式には遺族など約300人が出席。終戦から65年がたった今でも、遺族の悲しみは消え去ることなく、参列者は平和の尊さを胸に刻みながら、壇上の慰霊塔に向かって献花しました。

戦争の記憶

肉親に思いを寄せ
息絶える兵士たち



戸嶋 梅藏さん
(88歳・城西町)

昭和17年8月、21歳で招集され、衛生兵(負傷兵の看護をする兵士)として千島列島の幌筵島に渡りました。

千島第一陸軍病院で私は主に外科を担当でしたが、空襲でけがをした負傷兵が次から次へと運ばれてくるんです。爆弾の破片がのど元に刺さった兵士は手術が出来ず、とりあえずリンゲル液(点滴)を打つしかありませんでした。両目を失明した兵士は「何も見えなくなり」うちに帰って風呂に入れてるかなあ」って嘆いてました。

負傷兵は内地(本土)に送り返されますが、3、4カ月に1度しか船が出ないため、出航を待つ間に亡くなったかたも多かったんです。もがいて「衛生兵さん、衛生兵さん」って…… 戦地で頼れるのは私たちだけだったから。最後には、子どもや妻、両親の名前を呼びながら息を引き取っていききました。無念な気持ちで、肉親に思いを寄せながら死んでいったと思うと本当にかわいそうでした。



出征中の梅藏さん(23歳)

また、同じ班で並んで寝ていた岩手県出身のかたは、奥さんが病気のうえ子どもはまだ幼く、帰りたいっていつも言っていました。やつと一時的に帰ることになって喜んで出発したのに、途中、敵の潜水艦に撃沈され、家族に会う夢はかないませんでした。あんなに楽しみにしていたのに…… 今でも思うと胸が詰まります。

昭和20年8月15日、山で作業中に「すぐ戻れ」と連絡があつて、何かと思つたら日本が戦争に負けたと。

戦時中は、名譽の戦死だとか戦地で死んで当たり前という教育を受けていたのですが、死ぬことは何とも思いませんでした。戦争が終わつたと分かつた瞬間「死にたくない、内地に帰りたい」と初めて思いました。間もなく、当時のソ連軍によって武装解除となり、刀や銃器をすべて差し出したときは、背が高いソ連兵に殺されると思つて本当に怖かつたですね。

終戦後も患者がいるうちは戦地に残っていました。2年後に捕虜になり、カムチャツカで1年余り建築作業や道路工事をさせられました。23年11月、やつと日本に帰ってきたときにはもう27歳、私の青春時代は全部戦争に取られたんです。

終戦から65年、今はあまりにも豊か過ぎる時代になりました。戦争体験者は少なくなつてきたけれど、この悲惨な事実は、知らない世代に伝えなければと思いますね。悲しい出来事を二度と繰り返さないためにも、戦争なんて絶対やるもんじゃないと。